

駿河湾沿岸地域の農耕文化の形成

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-04-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 篠原, 和大 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00029718

駿河湾沿岸地域の農耕文化の形成

篠原 和太

はじめに

私の専門は考古学です。弥生時代に農業がどのように成り立っていったのかということが研究テーマで、静岡平野の登呂遺跡の研究などを行っています。登呂遺跡は平成の時期の再発掘調査を経て、十年ほど前に改めてムラの様子が復元されました（写真

1）。かつてはムラの周りは森で囲まれているようなイメージで復元されていましたが、実際はムラの目の前は水田だったということで、復元した住居などの集落の、溝を挟んだ真ん前に、広く水田が広が



写真1 平成の再発掘調査をもとに復元された登呂遺跡

る様子が当時のまんま復元されました。その水田で実際にコメを作ってみたり、当時の道具をそのままの形で復元して、どのように使われていたのか実際やってみるといって、実験考古学的な研究をしたりしています。

先に伊豆半島ジオパークのお話がありましたが、紹介されたいろいろな自然遺産の中で一番現代に近い時期の地質活動は、一万年ぐらい前の三島溶岩流の話ではないかと思えます。私の話はそこに当時暮らした人々の話ですが、一万五千年ぐらい前までが氷河期で旧石器時代、そこから温暖化が進み、一万年前は縄文時代早期です。八千年ぐらいに温暖化のピークが来て、その後また少し寒くなっているのですが、弥生時代は紀元前八〇〇年、つまり今から二千八百年ぐらい前から始まり、二世紀か三世紀ごろに終わったといわれています。弥生時代はコメを作った時代です。コメを作った田んぼは多くは平野にあり、古くから一般的には低地の水の便がいい所に水をくみ入れて田んぼが

つくられてきました。縄文時代に平野はまだ海だったということが時折言われますが、この弥生時代に水田が拓かれた舞台としての平野がどのようにしてできたのかということにもふれてみたいと思います。

私は静岡市をフィールドにして登呂のことなどを研究していますが、静岡市の登呂周辺のことは昔から発掘調査が行われていろいろなことがわかっています。一方で、静岡県東部は、遺跡の調査はいろいろと行われていますが、広い面積で調査が行われた遺跡は多くありません。遺跡がある場所や部分的な内容は分かっているところが多いのですが、そこで何が行われていたかということまで分かるような遺跡はあまり多くありません。ということで、今日は静岡平野の話も参考にしながら、できるだけ静岡県東部でどのように農耕が定着していったかという話をしようと思っています。

農耕文化形成期の沼津周辺

沼津市の西通北遺跡（写真2）は、JR沼津駅から二キロメートルほど西に行った線路沿いにある遺跡です。線路の北側で溝が出てきました。静岡県の調査の結果、この溝は内陸の浮島沼の低地に向かって弧を描くように掘られて

いることがわかりました。沼津市の調査では住居跡が二、三軒出ているので、いわゆるムラの周りを溝で囲った環濠集落と考えられます。この遺跡の時期は弥生時代中期の中頃で、静岡で本格的にコメ作りが始まった時期ですが、



写真2 沼津市西通北遺跡の集落を囲む環濠

その中でも古い時期の集落が発見されたということで注目を集めました。駿河湾沿岸地域で農業がどう成立していたかということを知る上でも非常に大事な遺跡だと思います。登呂遺跡は、西通北遺跡の時代からもっと下った弥生時代後期の遺跡ですが、農業が定着し、さらに地域の中の社会関係が成熟していった時期の遺跡になります。

弥生時代の後は古墳時代です。古墳時代の中でも相当古い時期の古墳として注目されたのが沼津市の高尾山古墳です（写真3）。この辺はあまり議論が統一されていませんが、弥生時代には、特に東日本では、階層分化が起こって傑出した首長が現れるような支配関係は認められていないと言えます。しかし、この古墳時代の初頭に、突如高尾山古墳

という大きな前方後方墳が
つくられたわけです。この
古墳の頂上には棺が一つ埋
まっています、明らかに一人
の人物のためにつくられた
お墓だということがわかり
ます。全長六〇メートル強
あります。そういうものが
突然つくられるようになった
ということ、社会的な関係が
大きく変化したということ
とだと思えます。



写真3 沼津市高尾山古墳

それから、今日一番お話ししたいのは地形の問題です。
弥生時代の始まりごろに富士山が山体崩壊を起こしまし
た。富士山が御殿場の方に向かって崩れて、それが百年か
二百年後、年代はよく分かりませんが、土石流になって沼
津や三島の方を襲います。これを御殿場泥流といっていて、
遺跡の発掘でもその痕跡が出てきています。土地の低い場
所は、弥生時代の前の縄文時代には海だったといわれてい
ますが、御殿場泥流が流れ下り、大量の土砂が低いところ
や海を埋めて傾斜や陸地をつくりました。いわゆる扇状地
です。そういった土地はコメ作りに向いていました。扇状
地では、水が伏流し、傾斜の先端の方でまた地表水になっ

て出てきます。きちんと流れている河川よりも、そういう
水の方が管理しやすいです。緩い傾斜があるので、水路を
引くと高い所から低い所へ水が流れていきます。ですから、
御殿場泥流は大災害だったものの、それによって低地が埋
まり、コメ作りに適した土地ができた。それで、初めて本
格的にコメを作ることができるようになったと考えられま
す。

実は静岡平野でも同じようなことが言えます。安倍川で
洪水が起き、縄文時代に水域だった場所が陸化し、コメを
作る条件が整いました。静岡でコメ作りが遅れたと言いま
したが、実はそういった条件が整って初めて本格的なコメ
作りができるようになったと言えるのではないかと思いま
す。

西通北遺跡でどのようなことが行われていたかというこ
とについては、あまり資料がありません。溝や土器は出て
いますが、他に石器などの遺物が出て情報が増えてこない
と分かりません。一方、静岡平野には、当時どのようにし
て農耕集落をつくっていったかということが分かっている
遺跡が幾つかあるので、それを参考にしながら、弥生時代
がどんな時代だったかという話をしていこうと思えます。

最後には高尾山古墳の話をしたと思います。実は登呂
遺跡にあった集落は洪水で埋もれています。いろいろな分

析方法によって、降水量が極端に多かった時期が分かるのですが、それによると、登呂が洪水で埋まった時期は西暦一二七七年ではないかと考えられています。もし本当にそうだったとすると、高尾山古墳がつくられたのは西暦二三〇年ごろといわれているので、登呂が埋まった時期からちょうど百年後ぐらいに大きなお墓をつくれる文化が成立したということになります。

列島と駿河湾岸の農耕文化の形成

日本列島に、どのように農耕が波及し、定着していったかということですが、図1にそれが模式的に示してあります。左側の上から下に日本列島の地域を九州から北に向かつて中国・四国、近畿、東海西部、北陸、東海東部、中部高地、関東、東西南部、東北北部と書いてあります。東海西部が濃尾平野、名古屋の辺り、東海東部が静岡の辺りです。西の方は濃い灰色（波及期）が先に入っていて、東の方は薄い灰色（波及期）が多いです。上側には弥生時代の時期区分とおおよその年代が書いてあります。弥生時代は元々、前期・中期・後期に分けていましたが、西日本、特に九州から中国・四国地方にかけては、もう少し古い段階から稲作の証拠が出てくるので、その時代を弥生時代早

期としています。上に年代が書いてありますが、これは放射性炭素年代を較正する新しい年代測定法で出された年代を反映しています。

この図は、私が一緒に研究している中山誠二さんという方が作成したのですが、どういう図かというと、稲作や農具、環濠集落などの農耕社会の証拠が各地でどのように出現しているかということと、その移り変わりを示したものです。左寄りのところで、東に薄い灰色が多いのは、稲

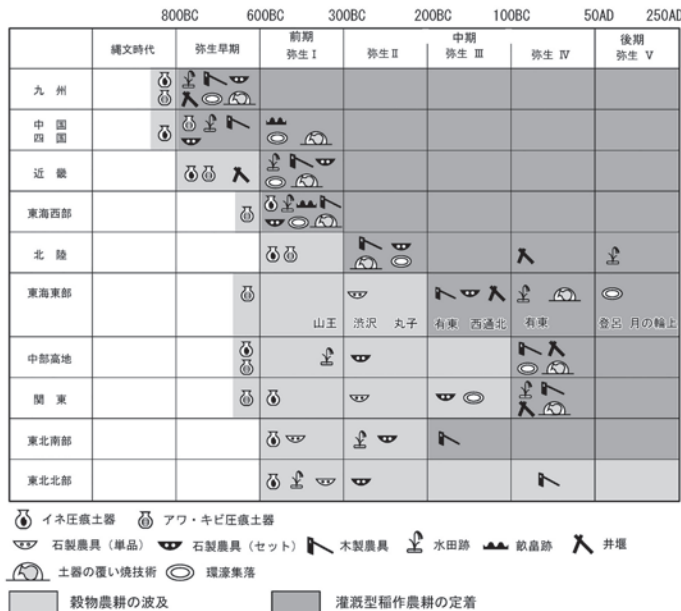


図1 日本列島における農耕の波及と定着

器で入れると、きれいに型が取れるのです。土器は砂がたくさん入っていて、ぼろぼろなので、そんなにきれいに取れないだろうと思っていたのですが、やってみると、コメの表面にある顆粒状突起という非常に細かいつぶつぶまできれいに型が取れました。それによって、実はもう一つ分かったことがあります。弥生時代にコメ作りが始まったと考えていたのですが、それだけではなくて、アワやキビなどの雑穀が出て

作の要素が北部九州に伝わり、だんだん東に向かって波及していったという解釈と一致します。稲作は愛知県濃尾平野の辺りまで一気に波及します。ただし、実は静岡辺りでも、この時期にイネやアワ・キビなどの跡が付いた土器が出てきていることが、この十年ぐらいで分かってきました。土器は粘土で作られているので、その中にいろいろなものが混ざり込みます。あるいは意図的に入れているのではないかという話もありますが、土器は焼き上げて作るので、例えば米粒が入っていたとしても、表面に出れば焼いたときに燃え尽きて土器に空洞ができます。そこに歯医者さんが歯形を取るときに使うシリコンを小さな注射器で入れると、きれいに型が取れるのです。

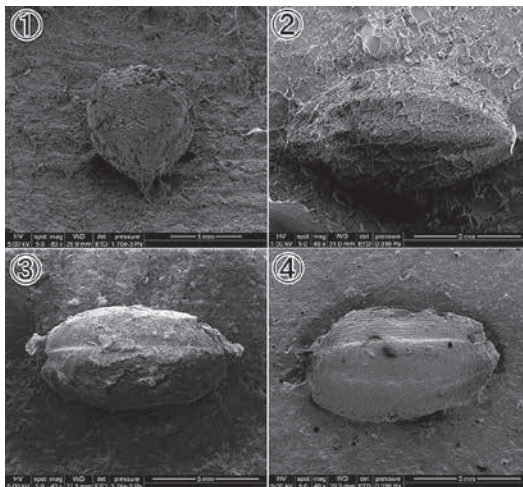


図2 静岡清水平野の弥生土器から検出した穀物のレプリカ（電子顕微鏡写真）
 ①佐渡遺跡:アワ（中期初頭）、②佐渡遺跡:コメ（中期初頭）、③有東遺跡:コメ（中期後半）、登呂遺跡:コメ（後期）

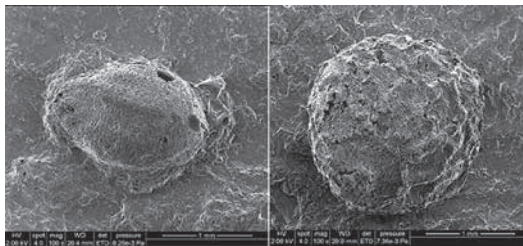


図3 沼津市大平丸山遺跡の土器（弥生時代中期初頭）から検出したアワ（左）とエゴマ（右）のレプリカ（電子顕微鏡写真）

くることがわかってきたのです（図2）。大きなムラをつくり、労働力がきちんと投入されないと、大きな水田を開くことはできません。そういった本格的な稲作の要素は西日本で先に整いますが、どうも東日本でも、結構早い段階からコメや雑穀があったことが分かってきました。でも、その時期は畑をやっているし、水田もやっているかもしれないけれども、そんなにたくさんコメを作ることはできないだろう。環濠集落のような大きなムラをつくり、本格的にコメを作りだすのはもっと後になってからだろうと想像できます。静岡あたりでは、農業が始まっているといえは始まっているという、ふわっとした段階が先

にあつて、それから弥生時代中期の中頃で本格的にコメを作りだしたということです。弥生時代というのは植物栽培が始まった段階であり、ただ、東と西では定着の過程が少し違ふと考えられるようになってきました。

考古学では、土器から年代を考える土器編年というものがあります。土器の破片であつても、何か特徴があれば、いつの時期のものかということが分かります。そこにくつついている米粒ですから、年代ははっきりしているわけです。遺跡から米粒が出てきても、もしかしたらアリの穴を掘つてそこから入った可能性がありますが、土器の中に跡があるとなれば、確実な証拠になります。

沼津市の香貫山の狩野川側に大平丸山遺跡があります。低地なのですが、弥生時代中期の前半の遺跡です。ここから出てきた土器に、先ほどのシリコンの手法で、アワとエゴマの跡があることが分かりました(図3)。エゴマは縄文時代からあるといわれている栽培植物で、アワは弥生時代になってから出てくる栽培植物です。コメは確認できませんでした。土器と一緒にイノシシのあごの骨が出てきたので、畑作と一緒にイノシシ狩りもしていたことが分かってきました。沼津市や静岡市の辺りでこういった調査をした結果、先ほど弥生時代中期の中頃に本格的な農業が始まったと言いましたが、それより前の段階でも畑作物があり、

農業と無縁ではなかったことが分かってきました。むしろ園耕や農耕文化複合といつて、農業が完全主体ではなく、いろいろな生業がありながら、その中に農業が取り入れられていた段階であつた可能性があります。狩猟採集と農業の間の段階でそういう形を考えることができますが、それと近い状態なのかもしれません。ただ、このぐらいの証拠があれば、農業を行つていた可能性はほぼ確実だと思えます。静岡は、弥生時代前期に農業の波及期があり、中期の中頃に本格的な農業が始まったと考えていいと思います。

農耕を育んだ地形の成り立ち

図4は、静岡県の縄文時代の後期と晩期の遺跡の分布を示した図です。後期の前半は遺跡が結構ありますが、晩期の前葉から後葉にかけて、特に駿河湾岸で遺跡が減ってきます。直接関係があるか分かりませんが、伊豆半島本体で最後に噴火した火山であるカワゴ平火山は、縄文時代の晩期、今から三千百年前ぐらいに噴火したといわれています。また、富士山も同時期に何度か噴火しており、それらももしかしたら影響しているのかもしれませんが、弥生時代に入つても遺跡が急に増えるわけではありません。遺跡はあるにはあるのですが、本格的な農業が始まっていないの

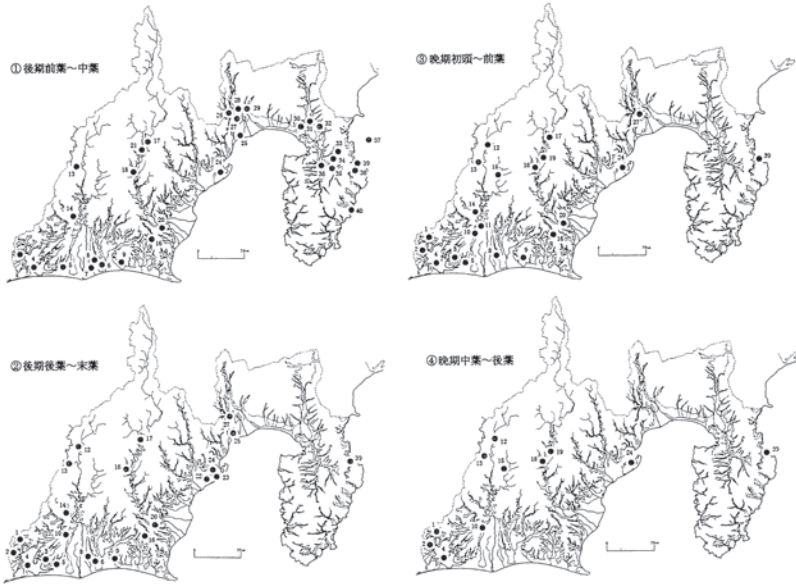


図4 静岡県の縄文時代後期から晩期頃の遺跡分布

で、一つ一つが結構小さくて分散的です。

ただ、弥生時代の前半に大きなイベントが起きます。先ほど言った富士山の山体崩壊です。紀元前八〇〇年ごろに御殿場方面にかなり大きく崩れました。そして御殿場泥流が起きるのですが、同じ頃、実は静岡市の辺りでも洪水が

起きたようです。洪水は水だけでなく、相当な土砂を運びます。これにより静岡平野がつくられるわけですが、では、その土砂はどこから来たのでしょうか。御殿場泥流は富士山の山体崩壊で出てきましたが、もしかすると、そのときに大きな地震があり、安倍川水系の上流域もかなり崩壊して、その山間部にたまった土砂が、雨の多い時期に一気に流れてきた可能性があるのではないかと思います。

御殿場泥流は、場所によっては一〇メートル、二〇メートルの堆積物があるという話を聞きます。場所によっては三島溶岩流がつくった地形もあり、分けにくいところもありますが、どうも溶岩流よりも広く泥流が広がり、かなり低い所まで薄く延びたようです。沼津市役所がある御幸町まで御殿場泥流が来たといわれています。

西通北遺跡から出てきた土器は、弥生土器なのですが、すごく太い線や縄文が入っていたりします。縄文土器だと言う人もいるかもしれませんが、縄文土器に細い首の壺はないので、真正正銘の弥生土器、東日本独特の弥生土器です。西通北遺跡にある溝は地盤を掘ってあるのですが、地盤のところに少し明るい色の堆積物があります(写真4)。これが御殿場泥流ではないかと調査を担当していた人が言っていたのですが、私もそうだろうと思います。富士山の山体崩壊は紀元前八〇〇年ごろで、それでせき止められ

てたまっていた湖があったのかもしれないが、それが百年後か二百年後に堰を切ったように土砂とともに黄瀬川を流れ下ります。雨がすく多かつた年があるのだと思います。西



写真4 西通北遺跡環濠の断面（掘り込まれた地盤の下のほうの明るい地層は御殿場泥流か）

通北遺跡は紀元前三〇〇年までさかのぼらないぐらいの時期だと思えます。ですから、御殿場泥流は、紀元前八〇〇年から紀元前三〇〇年までの間にあったと考えられます。溝に見られる堆積物が本当に御殿場泥流だとすると、その後も何度か洪水があり、それらが堆積したところに溝を掘っています。泥流や洪水によって扇状地ができ、そこに環濠集落がつけられたと言えます。恐らくこの環濠集落はコメを作っていたでしょう。浮島沼の低地の東側、黄瀬川の方から泥流が押し寄せて、末端の方まで緩い傾斜ができ、そこから地下水が出て、それを利用して水田をつくり、コメを作ったのではないかと思います。

図5は、黄瀬川や大場川が流れる御殿場泥流などでできた扇状地周辺の弥生時代中期の遺跡分布図です。四角が弥

生時代の中期中葉の遺跡、丸が弥生時代の中期後半の遺跡です。農耕が成立してきたぐらいの時期ですが、実はこの辺には四角の古い遺跡が多いです。上流の方は、岩盤が出ているような段丘の上に平場があり、そこに遺跡があります。ですから、あまり規模の大きな水田を営んでいたとは考えにくいですが、最初に現れてきた集団はそういう所で水田を営んでいたかもしれません。もう少し低い所へ行くと扇状地や三角州がありますが、ここに、後々大きな集落になっていく長伏という遺跡があります。境川沿いの自然



図5 黄瀬川扇状地～狩野川下流域の弥生時代中期遺跡の分布

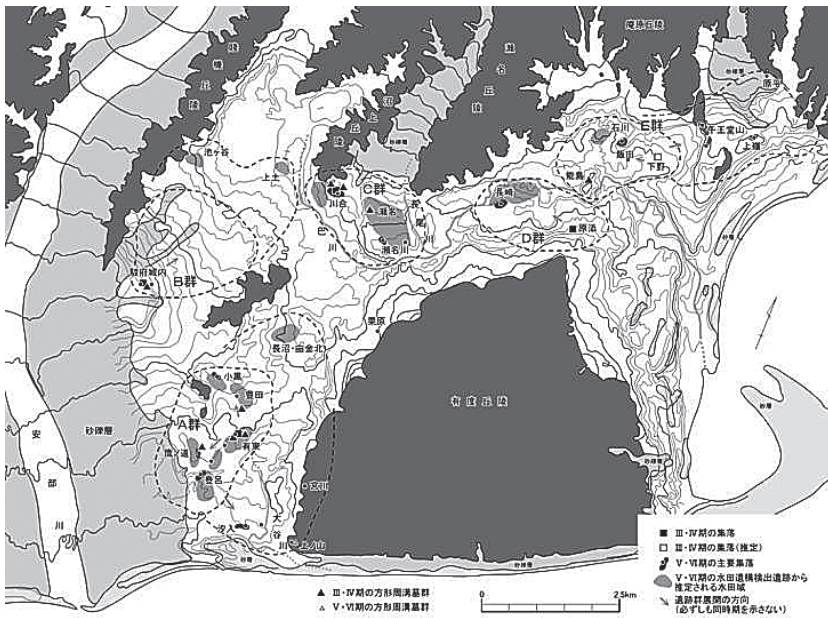


図6 静岡清水平野の地形と弥生遺跡の分布

堤防のような所に集落があり、方形周溝墓というお墓がたくさんつくられています。集落には一部、環濠が見つかっているのですが、環濠集落があつて、その周りにお墓があるという形だと思えます。これは扇状地の先端の水流を利用した本格的な農耕集落なのではないかと考えています。

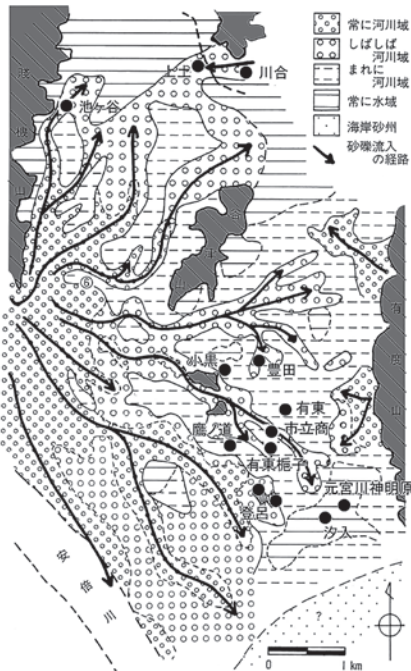


図7 静岡平野の縄文中期～弥生末期頃の砂礫（河川域）の進出

静岡平野でも同じようなことがあります（図6）。静岡平野には登呂遺跡があり、その近くに、登呂遺跡の母ムラといわれる有東遺跡もあります。図7の地図は、静岡大学農学部いらつしやつた加藤芳朗先生が作成された、静岡

その後の時期に、もしかすると泥流で狩野川の入り口が一部せき止められて、湖のようになっていた可能性があります。それを囲むように遺跡が増えていきます。元々の溶岩地形でできた水流を利用していたのか、地下水を利用していたのか、その辺ははっきりしません。扇状地に伴って農耕集落が形成されることがあるようです。

静岡・清水平野の地形形成と弥生遺跡の立地

平野の形成に関する図です。横線が引いてあるのは、縄文時代にここが水域だったことを表しています。それが縄文時代の終わりごろに安倍川の氾濫が続いて埋まっていき、扇状地ができます。その先端の方には弥生時代の農耕集落がたくさんあります。やはり地形と水利の条件がいい所を選んで集落をつくっていたのだらうと思います。

登呂遺跡の弥生時代当時の地面から、さらに一メートル弱掘ると、カワゴ平の火山灰の層が出てきます。カワゴ平は伊豆半島本体で最後に噴火した火山ですが、地層を調べると、夏に噴火して西に火山灰が飛んだようです。大抵の時期は偏西風で東へ向かって風が吹いているのですが、逆に吹いて西の方に飛んでいます。静岡平野の弥生時代の遺跡は扇状地にあります。大体どこを掘っても、その下からカワゴ平の火山灰が出てきます。普通、火山灰は陸地に降ると、雨で流されてほとんど残りません。ですから、火山灰が出てくるということは、そこが低い所か水域だったと言えるといわれています。カワゴ平が噴火したのは縄文時代の終わりごろ、三千年前ぐらいなので、その頃はみんな水域だったということになるのかと思います。ですから、先ほど、弥生時代が始まってから御殿場泥流と平地をつくるような洪水があったのではないかと言いましたが、まんざらでもないのではないかと思っています。そうなる

と、コメ作りができるようないい条件の土地が出来上がり、そこに登呂遺跡や有東遺跡などがつくられて環境が整ったのは、意外と新しい出来事だと言えるかと思っています。登呂遺跡よりさらに安倍川寄りにある鷹ノ道遺跡の辺りだと、弥生時代の遺跡の下に二メートル近い堆積があります。かなりの面積が埋まっているはずなので、やはり相当な土砂が短い間に平野に流れ込んだと言えると思います。

有東遺跡の形成と弥生中期の社会

有東遺跡は、弥生時代中期の中頃に形成され大きな集落になっていきました(図8)。今は市街地化されている場所で、川が流れていて、結構低い所です。その中でも古い時期の資料が見つかっているのは有東遺跡の東側の方です。新しい時期に広がった所には直線的な溝がたくさんあり、かなり大きなムラだということが分かっています。このムラの周りには方形周溝墓というお墓がたくさんつくられています。

有東遺跡の一角から古い時期の大きな穴が一つ出てきて、そこに土器が乱雑に捨てられていました(図9)。西北遺跡の土器より少し古いと思いますが、よく似ていて、口のあたりにも模様があたりします。弥生土器は、主に

なぜ他の地域の土器があるかという点、運ばれたか、あるいは人が来てそこで出身地の土器を作ったのか、いろいろと説はあると思いますが、私はやはりムラをつくる時に人が来て、そして次第に大きなムラになっていったのだらうと思います。

壺と、かめというコメを調理するためのものがあります。それ以外に、ここでは櫛描文くしがきもんで飾った土器が出てきました。この時期に櫛描文で土器を飾るのは、濃尾平野の尾張の地域です。それとそっくりな土器が出てきました。そういう細かい手法を見ていくと、静岡県西部、東遠江の掛川や袋井のあたり、愛知県東部、三河の豊橋辺りの土器と思われるものが結構たくさん入っていることが分かりました。

壺と、かめというコメを調理するためのものがあります。それ以外に、ここでは櫛描文くしがきもんで飾った土器が出てきました。この時期に櫛描文で土器を飾るのは、濃尾平野の尾張の地域です。それとそっくりな土器が出てきました。そういう細かい手法を見ていくと、静岡県西部、東遠江の掛川や袋井のあたり、愛知県東部、三河の豊橋辺りの土器と思われるものが結構たくさん入っていることが分かりました。

壺と、かめというコメを調理するためのものがあります。それ以外に、ここでは櫛描文くしがきもんで飾った土器が出てきました。この時期に櫛描文で土器を飾るのは、濃尾平野の尾張の地域です。それとそっくりな土器が出てきました。そういう細かい手法を見ていくと、静岡県西部、東遠江の掛川や袋井のあたり、愛知県東部、三河の豊橋辺りの土器と思われるものが結構たくさん入っていることが分かりました。

ま



図8 有東遺跡周辺の弥生時代集落の様子

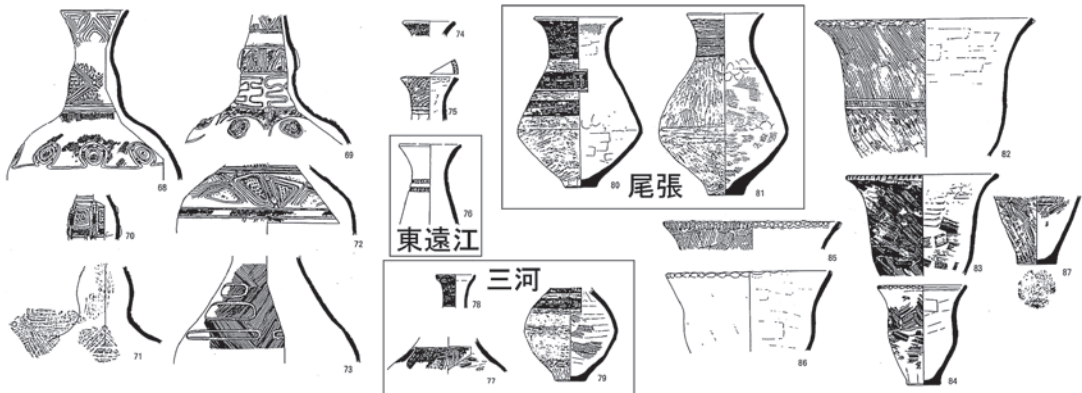


図9 有東遺跡16次調査SK05出土土器（弥生中期中葉、外来系土器を含む）

す。恐らく静岡平野は、その前にはあまり人がいないので、農業を始めるということ、いろいろな地域から人が来て、人口もそれなりに増えたのではないかと思います。

大きなムラという西通北遺跡がそうですが、西通北遺跡は、恐らく北側の発掘されていない場所に住家があったのだと思います。何人ぐらい住んでいたかは分かりませんが、溝で囲ってその中に集落を入れてしまうというのは、やはり大きな集団をまとめていくという意味があるのだらうと思います。環濠集落というと、戦いなどの話になってしまふ癖が考古学にはあるのですが、実際にはそれ以外にも、大きな集団が協力してどのように暮らしていたのかなど、もつと考えられることがあるのではないかと思います。

本格的なコメ作り

実際にムラの中で何をしていたかという事は、西通北遺跡ではよく分からないのですが、有東遺跡では、遺跡の中からたくさん石器が出てきます(図10左)。一部は刃がすごく分厚い石器です。縄文時代にはそういう石器はありません。分厚い刃の石器で何ができるかというと、大きな木を切り倒すことです。大きな木でも、軟らかい木だ

と、分厚い刃で切ろうとすると木がつぶれてしまつてうまくいきませんが、硬い木なら切り倒すことができます。大抵はカシだと思います。なぜ硬い木を切り倒さなければいけないかというと、木器を作るためです。弥生時代の鍬は頭の部分がカシで、柄が細くて、こんなもので田んぼを耕すことができるのかという議論が昔からあるのですが、実際に同じ素材で作ってみると、意外と丈夫です。それは、やはりカシの木で作っているからです。私はこれを作るのにグラインダーという電動工具で削り、相当な時間がかかりました。ですから、石器を使った当時の人は相当大変だったと思います

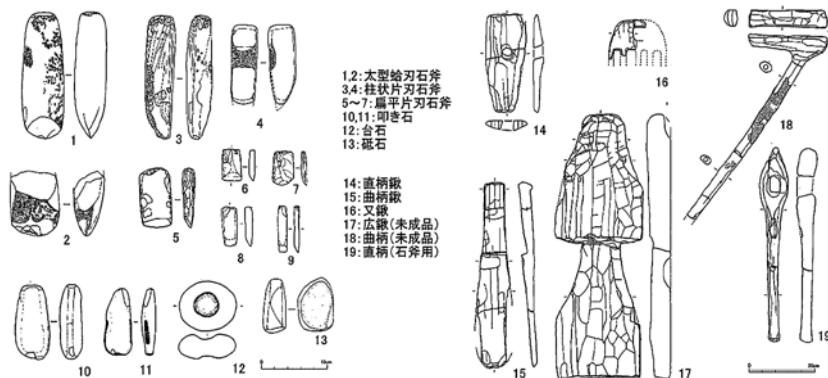


図10 有東遺跡出土の石器と木器

すが、コツコツと作ったのだと思います。あと、材を水に漬けておくのです。そこから引つ張り出して加工して、また水に漬けるということをしていたようだというのも分かっています。のこぎりがないので、木を横に切るのは大変です。くさびを打ち込めば縦に割ることはできるので、割るという作業を多用して、長い材を加工していき、最後に薄くなったところで切り離してそれぞれ仕上げていたようです。実際、つながった状態の木器がよく出てきます(図10右)。

西通北遺跡ではあまり石器が出ていませんが、狩野川流域の遺跡では、ある程度出ているので、沼津・三島の辺りでも弥生時代中期はそのような作業をしていたのだろうと思います。共同労働で根気の要る作業ですから、人的資源を集約的に投入する必要があります。それで多くの人が住むようになり、その労働力と、できた木器を使い、農耕地をつくっていったのだろう、だから一つ一つのムラが大きくなっていったのだらうと思います。

登呂の水田は有名ですが、それより前の時期の水田が発見された例はあまり多くありません。写真5は、静岡の静岡バイパスを造ったときに、かなり深い所まで掘って出てきた弥生時代中期の水田で、畔で区切られた比較的小さな区画がたくさんあります。いきなり広い面積を平らにする

には測量技術が要るのでしょうけれども、小さい区画をたくさんつくってそれを一面一面耕して、代かきをするのでしょう。そうすると傾斜があっても一面一面は均平を取る(平らにする)ことができます。

それで土地の高いほうから水を入れていけば、どんな灌漑ができていきます。古い水田はそういう仕組みでつくられているようです。

登呂遺跡などは、かなり平らな、傾斜の少ない所に水田がつくられています。それは後から手を付けた所のように、そういう所で水田を広くつくっていくには、また少し違う技術が使われているのだと思います。

お墓をつくる

有東遺跡の周りには、方形周溝墓というお墓がたくさん見つかっています(写真6)。西通北遺跡が調査された少し後、その南側の西通遺跡の発掘が行われたときにも、や



写真5 静岡市瀬名遺跡の弥生時代中期の水田

はり方形周溝墓が出てきました。ただ、集落の時期と比べると少し新しいので、本来にその墓域なのかという議論はありますが、とにかく環濠集落の周りには墓域がつくられています。



写真6 有東遺跡周辺（鷹ノ道遺跡）の方形周溝墓群

有東遺跡の周りは、お墓だらけです。棺桶を置いて周りの土を盛り上げるので、一つ一つのお墓は結構大きいです。古墳時代の終わりごろの遺跡からは小さい古墳がたくさん出てきますが、面積的にはそれとあまり変わらない大きさのお墓がたくさんつくられています。どれも一人ずつのためのお墓です。この人たちがみんなリーダーだったのかというと、それにしても、今のところ出ているものだけでも数百基はあるので多過ぎる気がします。骨が出てきた例が幾つかあり、小さい方形周溝墓からは子ども骨が出てきているので、墓の大きさは地位や階層で分けられるというよりも、年齢階梯的に分かれています。一つ一つ、個人のためにみんなで協力して大きなお墓をつくって手厚く

葬ることで、集落の結束力を高めるといような機能もあったのではないかと思います。

沼津市で一番大きな方形周溝墓が出たのは中原遺跡です（写真7）。浮島沼の中央付近の海側の砂堆の上で出ていて、ここに集落と水田があった



写真7 沼津市中原遺跡の大型方形周溝墓

のだろうという疑問が残りますが、かなりの規模です。ただ、周りは普通サイズの方形周溝墓がたくさんあり、その中に大型のものがあるという形です。もしかしたら地位を認められたような人物で、人々がそれをたたえてつくったお墓かもしれませんが、その権力が代々続いていったかどうかは、はっきりしません。

実は、函南町で、全長36メートルを超える方形周溝墓が一基見つかっています。弥生時代中期後半の結構古い時期のもので、ただ、それも大型のお墓が代々続いていくということはありません。ですから、大きなお墓は、そのときに何か大きな功績があったり、リーダーシップを発揮したりした人物のためにつくられたのかもしれませんが、次

が、扇状地の水利を共有していた可能性があり、協力的な関係もあつたのだろうということが推定できます。祭殿のまわりからは木でできた剣や刀が出てきます。そういった集落の人たちが祭殿の前で、木で作った剣などをみんなで振り回して踊ったのか、あるいは模擬戦をしたのか、いずれにせよ、それは本当の戦いではなく結束力を高めるようなお祭りだったのでだろうと考えられます。登呂の水田は登呂の人たちだけで耕したわけではなく地域で支えられたのだということも考えられます。

登呂の集落は洪水で覆われて消滅しましたが、最近、中塚武さんを中心とした木の年輪の中の酸素同位体を測る研究で、当時の降水量が分かるようになってきました（中塚二〇一二）。年輪年代法といって、年輪からは年代も推定できますが、そういったことを応用して、その年の降水量を推定することができるようになってきました。そうすると、西暦一二七年にすごい降水量があつたことが分かってきました。年代的にはちょうど登呂の洪水と同じぐらいです。その前からだんだん雨が多くなり、湿潤化して、登呂の大洪水の後は逆に干ばつがしばらく続くといった形で、十年、二十年の幅で降水量の大きな変化が起きています。どうもそれがあまり良くなかったようです。一度の洪水であればそれほど影響がなく元に戻るのですが、干ばつが

しばらく続いた後、突然、洪水がずっと続くというのが、集団生活スタイルを維持していく上では厳しい環境だといわれています。どうも二世紀の後半ぐらいからそのような厳しい時期が続き、それが社会にいろいろな影響を与えたのではないかと、例えば近畿地方では急速に階層化が進み、強力な権力をつくるような古墳時代への動きが進んだのではないかともいわれています（中塚前掲書）。

弥生後期から古墳の出現へ

沼津・浮島沼周辺では、弥生時代後期の前半に一時期あまり人がいなくなり、しばらくしてぼつぼつと環濠集落が出てきます。その集落が後期の後半、登呂の洪水ぐらいの時期から、愛鷹山麓の標高二百メートルぐらいの場所に集中して移動したことなどが分かっています。高尾山古墳ができる頃までは、集落は低地に下りてこないのではないかと思います。なぜ高い所に集まって住まなくてはいけなかったのかというのは、まだ謎です。ただ、それもいろいろな環境の変化に対応しているとは思いますが。その後、高尾山古墳が造られて古墳時代に移り変わるわけです。

静岡平野の古墳時代の始まりですが、平野の海岸部の汐入遺跡では登呂遺跡と同じような祭殿の建物が見つかって

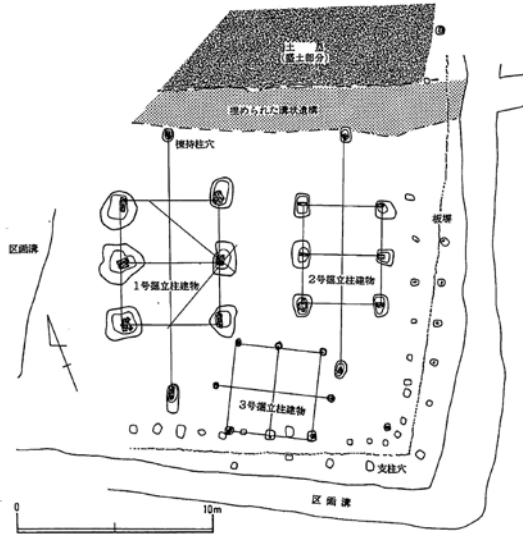


図12 静岡市小黒遺跡の堀・土塁・溝に囲まれた祭殿

います。ただ、梁を支えるための独立の棟持ち柱が建物本体からかなり離れているので、上部は相当高い建物だったと考えられます。柱も太く、深く埋められていたようです。小黒遺跡からも、やはり似たような建物の跡が二棟分と、その周りを囲う堀、溝、土塁が出てきました(図12)。二棟という、先ほど伊勢神宮の話をしました、まさに建て替えながら祭祀を続けていった最初ではないかという話も出ていたりします。大型の集落の一角にそういったお祭りの空間があります。登呂遺跡ではそれが集落の中心の開かれた空間にありましたが、古墳が出てくるような段階に

なると、それを首長のような特別な人物たちが土塁などで囲い込んだということだと思います。他の人たちは、堀と溝と土塁の外から、によつきり突き出した祭殿だけを見ていたのかもしれない。

そんな頃に高尾山古墳が造られる古墳時代になるわけです。高尾山古墳では、中国製の鏡や前方後方墳の形、出土した近畿や北陸など遠く離れた地域の土器など、いろいろなところとの交渉があることがわかります。高尾山古墳に現れる権力も内部的なものだけではない、外部との交渉の中で生じてきたのだらうなと思います。やはり、その頃に歴史が大きく動いたのだらうと思います。

まとめ

駿河湾岸に農耕社会が定着する頃、大きな地形の変化もあつたことがわかってきました。自然史の大きな流れに沿って人類社会も変わってきたということでもあるかと思えます。農耕集落の人々は、農具を作り、コメを作ることから必ずしも順調に発展したわけではなく、外部的な要素が強く影響して権力が成立していききました。そうして静岡の農耕社会が成立していき、次のステップへと進んで

いったのだろうかと思います。

静岡の農耕文化の形成については、登呂遺跡のことなどを中心に書いたものがありますので、参考にしていただければと思います（篠原二〇一九）。最初のほうでお話したように、私が作った木の鋤を使って、学生さんと一緒に登呂での栽培実験も行っています。そうした成果もお話できる機会があればなあと思っています。

参考文献

芦川忠利他 一九九九『長伏六反田遺跡』三島市教育委員会

加藤芳朗 一九九五「遺跡の立地・水田・火山灰」『登呂遺跡発見50周年記念報告』

五味奈々子 二〇〇八「東海東部における縄文時代後晩期の生業からみた地域性」『静岡県考古学研究』四〇

静岡県考古学会 二〇一三「駿河における前期古墳の再検討」

静岡県埋蔵文化財調査研究所 一九九二『瀬名遺跡（遺構編一）』

静岡県埋蔵文化財調査研究所 二〇一一『西通北遺跡』

静岡市教育委員会 一九九六「小黒遺跡」『ふちゅーる』四

静岡市教育委員会 一九九七『有東遺跡第16次発掘調査報告書』

静岡市教育委員会 二〇〇六『特別史跡登呂遺跡再発掘調査報告書（考古学調査編）』

篠原和大 二〇〇八「静岡・清水平野における弥生遺跡の分布と展開」『静岡県考古学研究』四〇

篠原和大 二〇一九「農耕文化の形成と登呂遺跡」『大学的静岡ガイド』昭和堂

篠原和大・中山誠二・岩田歩・稲垣自由・毛利舞香 二〇一七「静岡県内弥生時代植物関連資料調査報告」

『静岡大学人文社会科学部考古学研究室調査研究集録』二〇一六

篠原和大・真鍋一生・中山誠二 二〇一二「植物資料から見た静岡・清水平野における農耕の定着過程」『静岡県考古学研究』四三

中塚武 二〇一二「気候変動と歴史学」『環境の日本史1』吉川弘文館

中山誠二 二〇一八「栽培植物から見た日本列島の農耕起源」『境界の考古学』日本考古学協会二〇一八年度静岡

大会

図の出典

- 図 1 .. 中山二〇一八に加筆
- 図 2 .. 篠原他二〇一二より作成
- 図 3 .. 篠原他二〇一七より作成
- 図 4 .. 五味二〇〇八より転載
- 図 5 .. 芦川一九九九を改変加筆
- 図 6 .. 篠原二〇〇八より転載
- 図 7 .. 加藤一九九五に加筆
- 図 8 .. 静岡市教育委員会一九九七より転載
- 図 9 .. 静岡市教育委員会一九九七より篠原作成
- 図 10 .. 篠原二〇一九を改変転載
- 図 11 .. 静岡市教育委員会二〇〇六より転載
- 図 12 .. 静岡市教育委員会一九九六より加筆転載
- 写真 1 ・ 写真 7 ・ 写真 8 .. 筆者撮影
- 写真 2 ・ 写真 4 .. 静岡県埋蔵文化財調査研究所二〇一一
より転載
- 写真 3 .. 静岡県考古学会二〇一三より転載
- 写真 5 .. 静岡県埋蔵文化財調査研究所一九九二より転載
- 写真 6 .. 静岡市教育委員会提供